

“反応リズム能力” ～時間と空間～

平衡能力から定位分化能力と、これまでにいろいろな話題を扱ってきました。今回から反応リズム能力のことについて触れていくことにしましょう。反応リズム能力というのは、一つの能力群ではありませんが、定位分化能力がそうであったように、反応リズム能力も、この中にはいくつもの能力が含まれています。まずは全体的な話から進めたいと思います。

“反応”については、何かの刺激に対して素早く応じるというイメージがあります。そして、これに加えて、より正確にということも大切ですよね。一方で、“リズム”については、いわゆるリズム感という言葉がよく使われ、特に音楽の分野に関係しているというのが一般的な見方です。しかし、意外に思われるかもしれませんが、音楽の世界ではこの言葉はあまり使われていません。使われる場合があっても、一般の方が感じるニュアンスとは異なっています。こうした“反応”と“リズム”については、いずれの場合も時間に関係する能力という意味合いで理解されています。つまり空間とは違うものというのが一般的な解釈です。これはこれで問題があるわけではありませんが、コーディネーション能力としては、この空間が非常に重要な意味を持つこととなります。

少し飛躍的な話をしますが、物理学の世界ではこの時間と空間は一体的に捉えられています。研究者によってその解釈は違ったとしても、まったく別のものとしては考えられません。しかし、これは宇宙、天体については頻繁に登場する話題として日常では耳にしますが、現実の生活においては一体的という解釈はしないのは確かです。そこに原理的な問題と私たち人間が日常的に感じる感性とは異なるという事実が横たわっています。相対性理論において、静止する物体、運動する物体間においては質量、時間、形状も異なるということは、私たちの感性の世界では実感として捉えることはできないでしょう。しか

し、人工衛星での時間経過を重力の影響による地上との誤差を補正するというのが事実です。自然における法則は、私たちの感性を超えたものとして客観的に作用しているわけですが、本当に分離されるのでしょうか。

そこで、私たちの感性の世界からも考えて見ましょう。実感として確かに時間と空間は別物として捉えられるかもしれませんが、その感性においても、遠い距離と長い時間には何か共通した感覚が存在しています。“長い距離(long distance)”と“長い時間(long time)”は同じ“長い(long)”という言葉を使いますが、単に言葉の問題だけではなく、確かに共通した感覚がそこにあると思いませんか。遠い所へ移動するには時間がかかり、長い時間には、いろいろなことができる、いろいろな所へ行けるといった“拡がり感”に共通した感覚を持っています。

この共通した感覚は単に感覚の問題として止まりません。まさに、コーディネーション能力における非常に重要な意義を持っています。そこで、もとに戻って、反応とかリズムといった問題を一つずつ検討してみることにしましょう。

